

中学校体育授業におけるベースボール型の実践研究

発表者 海東 厚紘
指導教員 大津 展子

キーワード：ベースボール型、スポーツ教育モデル、社会的態度の変容

1. 緒言

現在わが国では、球技分野の教材開発が盛んに行われている。球技分野のなかでも、ベースボール型は、学習指導要領上の位置づけが緩やかに規定されていたこともあって、他のボールゲームと比べて実践研究が立ち遅れていたが、2008年の指導要領改訂を機に授業研究が活性化し、多様なアプローチが試みられるようになった。それらの実践例は学習指導要領に示されている「攻防を楽しむ」ことをいかに達成するために考えられたものであり、その「攻防を楽しむ」ための打つ・走る・投げる・捕るといった能の習得（中垣,2009）や戦術的な学び（中井,2006）に着目した教材がほとんどである。しかし、現行学習指導要領に示されている生涯スポーツとして継続して行うための資質・能力を育てるという究極目標を達成するためには、ベースボール型の独自の魅力や技能を身に付けさせるとともに、協力的態度や社会的態度を育成することが必要である。中学校学習指導要領解説保健体育編（2008）の体育分野の一つに「運動における競争や協同の経験を通して、公正に取り組み、互いに協力する、自己の役割を果たすなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる」と示されている（学習指導要領,2008）。

大津ら（2010）の研究では、それらの目標を達成するために有効だと考えられるスポーツ教育モデルを適用した授業を行うことによって、生徒の社会的な行動や意識が変容することを明らかにしている。

そこで本研究では、中学校体育授業に社会的態度の育成を重視するスポーツ教育モデルの特性を取り入れたベースボール型の授業実践をすることによって、生徒の社会的な行動や意識の変容やそれに関する教師行動を検討することを目的とした。

2. 研究方法

2-1 単元計画と授業実践者

本研究では4つの単元を対象とした。スポーツ教育モデルの6つの特性を取り入れ、10時間の単元で実践した。

2-2 実験授業の実施の時期と対象

I県S市立Y中学校1・2年生2クラス（4クラス89名）を対象に、2015年10月から12月に行われた。生徒は、小学校においてベースボール型の経験がほとんどなく、1・2年生とも中学校では、初めてのベースボール型の授業であった。授業者は、以前より体育授業研究を継続的に行っている40代のベテラン教師（教師歴：中学10年小学6年専門種目：ラグビー）であった。

2-3 データ収集の時期及び項目

a. データ収集の時期

すべての単元の2時間目から10時間目を対象とした。

b. データ収集の項目

①形成的授業評価

高橋ら（2003）によって作成された形成的授業評価は、こどもの心情から授業の成果をうかがい知ることができるため、本研究においても、生徒の授業評価を検討するために行った。

②授業中及びゲーム中のマナーに関する自己評価

スポーツ教育モデルを適用した実践を行うことで、マナーに対する行動や意識が変容したのかを検討するために大津ら（2010）が使用した調査表を適用した。

③教師行動の観察分析

実践者がどのような相互作用行動を行っていたのかを知るために、授業中の教師の言語活動を逐語記録し、人間関係行動・情意行動に関する言葉かけを抽出しカウントした。また、インストラクション場面で、教師がどのような言語行動を行っ

図1 単元計画

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
	簡易ゲーム			練習試合			リーグ戦		
	集合・あいさつ・本時の説明								
	学習内容の確認								
オリエンテーション	試しのゲーム ベースにつくごとに得点 1塁…1点 2塁…2点 3塁…3点 本塁…4点 チームの反省 課題練習			3回表裏のゲーム 作戦タイム ルールの確認 本塁で1点 全員攻撃 フライ…守備側に1点 アウトゾーン フェアプレイを行う グラウンド整備をする チームの反省			4回表裏のゲーム 作戦タイム 円陣 あいさつ 応援タイム（2回終了時） グラウンド整備をする チームの反省 記録の集計 表彰式		
	学習のまとめ								

ていたのかを知るためにカウントされた場面の頻度と割合を算出した。

2-4 データ処理

本研究では、単元の進行による「形成的授業評価」と「授業中及びゲーム中のマナーに関する自己評価」得点の推移を単純集計により比較検討した。また、「教師行動の観察分析」を行う際に単純集計を行った。これらはすべて、Microsoft Office Excel を使用した。

3. 結果と考察

3-1 形成的授業評価の得点の推移

すべてのクラスの形成的授業評価の総合評価が5であったことから、単元を通して本実践授業を高く評価していたことがわかった。特に、「意欲・関心」と「協力」に関する項目の得点は高い得点で推移していたことから、「チームの仲間と協力し」という授業目標を達成しようと努力したことが推察された。

表1 形成的授業評価の得点

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
成果	2.67	2.49	2.63	2.83	2.84	2.78	2.81	2.74	2.86
意欲・関心	2.84	2.66	2.71	2.93	2.93	2.93	2.93	2.89	2.95
学び方	2.55	2.66	2.60	2.81	2.83	2.83	2.86	2.84	2.88
協力	2.89	2.71	2.83	2.81	2.88	2.85	2.95	2.86	2.98
総合評価	2.74	2.63	2.69	2.84	2.87	2.85	2.89	2.83	2.92

3-2 授業中及びゲーム中のマナーに関する自己評価の得点の推移

すべてのクラスの授業中及びゲーム中のマナーに関する自己評価の得点が高かったことから、単元を通して授業中およびゲーム中のマナーに対して、生徒自身がよい態度で行動できたと考えていることがわかった。単元を追うにつれて上昇する傾向がみられ、本実践に一定の効果があつたと推察される。

しかし、設問3・4・6は他の項目に比べると低い得点の傾向にあつた。このことから、授業中の社会的態度が素晴らしく、体育授業に満足している生徒でも、設問3・4・6の質問内容である「チーム以外の友達のいいプレイに拍手したり褒めたりすること」や「勝った時偉そうにしたり負けた時ふてくされたりしないこと」、「自分の役割を果たせたと実感すること」は難しいということがわかった。これらの項目は、単元はじめの試しのゲームから単元なかの練習試合にかけて上昇していたが、単元おわりのリーグ戦に入った最初の授業などで低い得点になる傾向がみられた。クライマックスのイベントになることによって「勝ちたい」という気持ちが高まり、素直に相手のプレイを褒められなかったり、負けた時にふてくされたりする様子が見られたことが関係すると推察された。

表2 授業中及びゲーム中のマナーに関する自己評価の得点

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
設問1	2.90	2.90	3.00	2.95	3.00	2.90	3.00	2.95	3.00
設問2	2.80	3.00	2.76	3.00	2.95	2.90	3.00	3.00	2.86
設問3	2.65	2.75	2.76	2.86	2.95	2.85	2.95	2.91	3.00
設問4	2.50	2.85	2.95	2.86	3.00	2.90	3.00	2.95	3.00
設問5	2.50	2.75	2.86	2.95	2.86	2.90	2.90	2.82	2.90
設問6	2.80	2.20	2.67	2.71	2.82	2.85	2.71	2.86	2.90

3-3 教師行動の観察分析

単元ごとに、生徒の人間関係行動・情意行動に対

する言葉かけを場面別でカウントした。すべての単元で共通して言えることは、インストラクション場面では必ず1回以上人間関係行動・情意行動に対する言葉かけが行われていたということである。授業のはじめとおわりに、5～10分のインストラクション場面があり、そこで必ず態度に対する言葉かけが行われていた。このことから、単元はじめのオリエンテーションで具体的な評価観点を明示するだけでなく、授業のはじめかおわりに態度目標を示したり、反省をさせたりすることが、人間関係行動や情意行動を矯正させ、社会的な態度への意識の変容に有効であったと推察される。

また、インストラクション場面では、1,2センテンスの短い言葉かけではなく、5～20センテンスの生徒の心に響かせるような指導や問いかけが行われていた。

3-4 抽出生徒の分析

抽出した生徒に共通して言えることは、成功体験が少なく自己有用感が低いことや、集団のなかで自分をうまく表現したり良好な関係を築いたりすることが苦手なことであった。これらの生徒に関しては、今回の実践を通して大きく得点が増えることは見られなかった。しかし、授業を観察していく中で、自分やグループの成功に声をあげて喜んだり、作戦タイムで積極的に自分の意見を述べたりする姿が見受けられたことから、年間を通して継続して行えばさらなる改善が望めるのではないかと推察された。

3-5 単元としての課題

形成的授業評価の「成果」の項目が低い得点になった原因として、本単元の課題が「チームとして」の意味合いが強くなり、個人としての成長を実感しにくかったことが考えられた。反省の時間に、チームだけでなく個人の反省を行い「わかった」のか「できたのか」を考えさせることが必要であったと推察された。また、「学び方」の項目が低い得点になった原因としては、メインゲームのあとにチーム練習を位置づけていたが時間の都合上行うことができず、個人の技能を高める機会を保障することができなかったからであると推察された。

引用参考文献

- 中垣貴裕 (2009) 中学校におけるベースボール型ゲームの守備のゲームパフォーマンスに関する評価基準の事例的検討ー。スポーツ教育学研究 Vol.29, No.1, pp.29-39
- 中井隆司 (2006) 役割分担に基づく戦術的認識を学ぶベースボール型ゲームの実践開発ー。奈良教育大学紀要 Vol.55, No.1
- ダリル・シーデントップ：高橋建夫監訳 (2003) 新しい体育授業の創造ースポーツ教育の実践モデルー。大修館書店：東京。
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領保健体育編解説。大蔵省印刷局：東京。
- 大津展子 (2010) 体育授業における社会的な行動の変容に関する検討ースポーツ教育モデルの実践を通してー。スポーツ教育学研究 56号 Vol.29, No.2